



## 6 番目の語り手



## Part 1 悪魔の覚醒



その者は随分と長い間眠っていた。名は無く男でも女でも無い。というよりその者は夢の中を渡り歩いて存在してきたので何者であるかは意味を持たなかった。仮にそれを夢魔と名付けよう。夢魔は人の夢の中に潜り込み欲望や恐怖を引き出し夢を操ることができた。人は夢の中では無防備だ。簡単に夢魔の暗示で操られる。夢を見させるだけでなく夢の中で起きたことを現実に変える事もできる。夢の中なら過去・現在・未来を行き交うことも可能だ。夢魔は最後にとりついた人間が強い意志を持って永遠の眠りを欲したが為に不覚にも夢の中に閉じ込められていたのだが誤った儀式によって封印を解かれようとしていた。

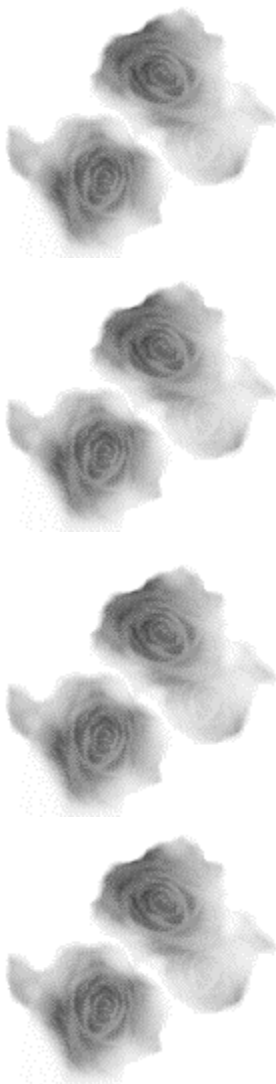
## Part 2 研究合宿

薄暗い森の中を私は歩いていた。霧が立ち込めていて行く手がよく見えない。あとどの位だろうか急がないと集合時間に間に合わなくなるかもしれない。今日からT教授の主宰する研究合宿が行われる。やがて前方から薔薇の臭いが漂ってくる。S婦人の館が近い証拠だ。冬とはいえ穏やかな一日であったが夕方から冷え始め、陽が落ち始めると霧が出てきて森の中はすっかり闇に包まれてしまった。

合宿の研究テーマは「夢の分析」だ。集合当日の夜はオリエンテーションを兼ねて食事会がありその日の夜に見た夢から順次夢の内容を翌日の夕食会の席で語り研究のテーマとする趣向だ。期間は人数に合わせ2週間。どんな夢をみるかは想像がつかない。初日の夜は食事を取りながらの雑談となったが話題はやはり夢についての話に終始した。色つきの夢とか実際に臭いを感じたとか夢の中で自分が夢を見ている話や見たい夢を見る方法があるか、自分の意思で夢を変えることは可能かなど場が盛り上がり和む結果になった。自分が興味を持ったのは絶対見ることが出来ない夢があるという話だ。

人は変身したり若い頃の夢は見られても今より歳を取った夢は見られないという説だ。言われてみればそんな気もする。だが夢の恐怖で眼が覚めたら白髪になっていたという話は聞いたことがある。

飛び入り参加したユングという少年の話にも引き込まれる何かがあり自分らとは違う才能が感じられた。気になったのはS婦人だ。T教授の懇意ということで館を無償で使わせてくれ傍聴者として参加しているが何かと得体の知れないところがあり怪しげな儀式を主宰しているという噂の多い人だ。会がお開きになりそれぞれの寝室へと引き上げたが頭が冴えて寝つけない。見れば一匹の黒猫が部屋の隅でこちらの様子を伺っている。らんらんと光る猫の目を見ていたら古代には猫が太陽神として崇められていたことがあるのを思い出した。猫の目の変化は太陽の周期と連動していて神が猫の眼を借りて暗闇をみているからだという。そんなことを考えているうちに眠りの途についた。



皮切りは暗闇の底へ落ちる夢だった。寝付いた瞬間ベッドの足側からシーソーが傾くようにゆっくり傾斜してゆき限界を越えたと同時に頭から真逆さまに落ちた！思わずガバッと起き上がったらベッドの上だった。部屋の中は暗く黒猫の眼だけが光っていた。

それからというものの恐ろしい夢ばかり見る。合宿のテーマでもあるので列記しておくことにする。

街の中の道を歩いているとやがて小さな丘が連なる場所にいつの間にか居る。丘の一つに銃を持った男がこちらを狙っている。突然男が銃を撃ち始める。身を隠す物も無くあわてて丘の起伏を利用して逃げるが執拗に銃声が追いかけて来る。

高層ビルが立ち並ぶビル街に一人たたずんでいる。ふと疑問が湧く。高層ビルなどという言葉は何で知っているのだろう。このような無機質に並ぶ建物は見たことがないのに。時間は早朝のようで陽は出ていないが明るい。道の向こうから大きなジャックナイフを持った黒づくめの男が迫ってくる。助けを求め逃げるが誰も出てこない。建物の扉はいずれもしまっており中には入れない。背後にナイフが突き刺さる気配を感じたところで眼が覚める。気が付けばうつぶせの背に猫がつめを立てている。

薔薇の香の漂う庭に一人で立っている。薔薇を眺めていると足元の地面が見る見るうちに水面に変わって行く。その水面に黒い頭巾をすっぽりかぶったの男の影が大きく映し出される。とたん

に身体が水の中に落ちる。底に足をつけようとしたが届かずあわてて水面に顔を出す。眼の前の花壇にあがろうともがくが先に進まない。いつのまにか黒猫が花壇にいて大きな鳴き声を上げる。その声で気が付くと全身汗びっしょりでベッドの上にいる。眠りに就いて眼を開けると遠い町並みが見え高い煙突のような塔の天辺に立っている。足場は両足が乗る程度。周りは何も無く足がすくむ。頭がくらくらして倒れそうになったとき猫の鳴き声がして眼が覚めた。

得体の知れない夢ばかり続くのでノートを見ながら昔のことを思い出す。子供の頃化け物の夢を見ることが続き寝るのが怖くなったことがある。父親が何かを見せおまじないをしてくれたが遠い昔のことで思い出せなかった。



気が付くと館へ続く一本道に立っていた。両側は芝生になっているがそばの花壇からは薔薇の香りが匂っている。この頃はこれが夢の中の出来事だという事を自覚している。案の定道の向こうから黒い頭巾をかぶった修道士風の男がやってくる。顔は頭巾に隠れてよくみえないが両眼のあたりが薄く緑色に光っているように見える。手には刃渡り 90 cmはあろうかという草刈用の大鎌を持っている。近くまで来ると男は大鎌を薙ぐように横に払う。すると悲鳴とも思える音が発し人が断末魔の叫びをあげている姿が脳裏に浮かぶ。ロープに吊られて悲鳴を上げる女、車にはねられる悲鳴、焼かれて転げまわる映像、男の姿はまさしく死神の姿をしていた。男は大鎌を大上段に構え自分の頭に振りかぶろうとした時だった。黒猫がすり寄ってくる。気が付くと右の手に何かが握られている。拳銃だ。男に気取られないようチラッと見ると S & W の刻印があり見たことも無い重厚な拳銃だった。突然父親の言葉を思い出す。父は玩具の銃を手渡しこれがあれば化け物など退治できると言って枕元にそれを忍ばせてくれた事を。銃は其の時の物とは違ったが威圧感のある頼もしい存在に思えた。男が大鎌を振り下ろす瞬間、顔面の間に向かって引き金を引いた。激しい銃声とともに目の前が白くはじける。気が付けばベッドの中におり朝の陽射しが降り注いでいる。目の前にはまだ暖かい薬きょうが一つころがっている。銃を探したがどこにも見当たらなかった。



さて次は朝日がでてきたところで日出彦さんをお願いしたいと思います。